

# 「角鹿」というトポス

保坂達雄

## はじめに

角鹿は古代朝鮮との交通の要衝とされるが、仲哀天皇とそれに続く応神天皇の二代はこの角鹿と深い関わりをもっていた。仲哀紀ではまず角鹿行幸と箭飯宮造営から始まり、熊襲討伐から新羅征討へと展開する。応神天皇も十三歳の皇太子時代、角鹿の箭飯大神に参拝し、大神と名易えをした。仲哀から応神に及ぶ記紀の叙述がともに角鹿を発足点に据える理由はどこにあるのだろうか。

仲哀・応神と続く両王朝にとって、北方に位置する角鹿は濃密な意味と有意味的な方向性をもった神話的宗教的な空間とと言えるのだろうか。伊勢や出雲また熊野が有する神話性と同じように、古代大和王権にとって角鹿は神話的トポスだったのだろうか。大陸方向に向けた古代大和王権の視線を辿り返ししながら、角鹿に籠められた神話的意味について考察してみたい。

## 一 仲哀・応神天皇と角鹿

まず初めに仲哀・応神天皇と角鹿との関わりを見てゆく。『日

本書紀』仲哀天皇条では、天皇は元年春正月に即位、二年春正月、氣長足姫尊立后のあと、角鹿行幸の記事となる。

二月の癸未の朔にして戊子に、角鹿に幸し、即ち行宮を興てて居します。是を箭飯宮と謂ふ。即月に、淡路の屯倉を定む。

三月の癸丑の朔にして丁卯に、天皇、南国を巡狩したまふ。是に、皇后と百寮とを留めたまひて、従駕へる二三の卿大夫と官人数百して、軽行したまふ。紀伊国に至りまして、徳勒津宮に居します。是の時に、熊襲叛きて朝貢らず。天皇、是に熊襲国を討たむとしたまひ、則ち徳勒津より発ちて、浮海よりして穴門に幸す。即日、使を角鹿に遣したまひて、皇后に勅して曰はく、「便ち其の津より発ちて、穴門に逢ひたまへ」とのたまふ。

夏六月の辛巳の朔にして庚寅に、天皇、豊浦津に泊りたまふ。且、皇后、角鹿より発ちて行し、淳田門に到り、船上に食したまふ。  
(仲哀紀二年一、三、六月)

二年二月、仲哀天皇は角鹿に行幸し箭飯宮を造営する。翌三月に皇后と百寮をその地に残し、「軽行」して南国巡狩に出発。

紀伊国の徳勒津宮で熊襲叛乱を聞き、みずから討伐に出発する。一方、角鹿滞在中の皇后にも穴門で合流するよう指令する。このように記されている。こののち仲哀紀の叙述は熊襲討伐から神功皇后の新羅征討へと展開するのであるが、そうした後の展開に先立ち、なぜ即位したばかりの仲哀天皇は遠く北方の角鹿へ行幸したのだろうか。またなぜ皇后にその地に留まるよう命じたのだろうか。神功皇后には角鹿に留まらねばならぬ理由があったのだろうか。

もう一個所は仲哀天皇死後のこと。この合流によって後に新羅征討を果たすことになった神功皇后は、齧坂王・忍熊王の叛乱を制圧。三歳の我が子誉田別皇子（後の応神天皇）を皇太子に立てる。その十年後の春二月、大臣武内宿禰に命じて太子を角鹿の箭飯大神に参拝させる。

十三年の春二月の丁巳の朔にして甲子に、武内宿禰に命じて、太子に従ひて角鹿の箭飯大神を拝みまつらしむ。

癸酉に、太子、角鹿より至りたまふ。

（神功紀 撰政十三年二月）

ここでもまた、神功皇后はなぜ武内宿禰に命じて、すでに皇太子となっていた誉田別皇子をわざわざ角鹿の箭飯大神に参拝させたのだろうか。この時、十三歳。角鹿の大神を参拝するということは、何を意味していたのだろうか。記紀にはただ大神と名易えをしたという事実だけが記されている。

「二に云はく、初め天皇、太子と為りて、越国に行して、角鹿の箭飯大神を拝祭みまつりたまふ。時に、大神と太子と名を相易へたまふ。故、大神を号けて去来紗別神と曰ひ、

太子の名は誉田別尊とまをすといふ。然らば大神の本名は誉田別神、太子の元名は去来紗別尊と謂すべし。然れども見ゆること無く、未だ詳かならず。」（応神天皇即位前紀）  
『日本書紀』に記されているこの名易えとは、いったいどういう意味をもっていたのだろうか。その意味を考える上で、次の例が参考となる。

初め天皇の生れましし日に、木菟、産殿に入れり。明日に、誉田天皇、大臣武内宿禰を喚して語りて曰はく、「是、何の瑞ぞ」とのたまふ。大臣対へて言さく、「吉祥なり。復昨日、臣が妻の産む時に当りて、鶴鶴、産屋に入れり。是亦異し」とまをす。爰に天皇の曰はく、「今し朕が子と大臣の子と、同日に共に産れたり。兼に瑞有り。是天之表なり。以為ふに、其の鳥の名を取り、各相易へて子に名けて、後葉の契とせむ」とのたまふ。則ち鶴鶴の名を取りて太子に名け、大鶴鶴皇子と曰し、木菟の名を取りて大臣の子に号け木菟宿禰と曰ふ。是、平群臣が始祖なり。  
（仁徳紀元年正月）

これは応神天皇の太子大鶴鶴皇子の名換えについての説話である。皇子誕生の日、大臣武内宿禰の子もまた生まれた。その日それぞれの産屋に飛び込んだ木菟と鶴鶴を瑞兆と見なし、「其の鳥の名を取り、各相易へて子に名けて、後葉の契とせむ」としたとする名換え譚である。後に仁徳天皇となった大鶴鶴皇子の名前は、武内宿禰の子の産屋に入った鶴鶴に由来するのだという。このように名換えには神との交換だけでなく、臣下との交換もあった。このことについて、折口信夫は次のように述べている。

天子はある神さまがお育てするのだ。すると天子と神とが

名を取り替えられる。誉田天皇（応神）は、角鹿の筭飯大神と御名を取り替えられた。実は神の名が天子の名となつたわけだ。ところが更に身分の高い者の養い子として、臣下に育てられると臣下の名がつく。

この説を踏まえるならば、太子が大神と名易えをしたということは、筭飯大神が太子の育ての神であり守りの神となったということになる。ならば、なぜ角鹿の筭飯大神でなければならなかったのだろうか。

故、建内宿禰命、其の太子を率て、禊ぎせむと為て、淡海及若狭国を經歷し時、高志の前の角鹿に飯宮を造りて坐さしめき。爾に其地に坐す伊奢沙和氣大神の命、夜の夢に見えて云りたまひしく、「吾が名を御子の御名に易へまく欲し」とのりたまひき。爾に言禱きて白ししく、「恐し、命の隨に易へ奉らむ」とまをせば、亦其の神詔りたまひしく、「明日の旦、浜に幸でますべし。名を易へし幣献らむ」とのりたまひき。故、其の旦浜に幸行でましし時、鼻毀りし入鹿魚、既に一浦に依れり。是に御子、神に白さしめて云りたまひしく、「我に御食の魚給へり」とのりたまひき。故、亦其の御名を称へて、御食津大神と号けき。故、今に氣比大神と謂ふ。亦其の入鹿魚の鼻の血髭かりき。故、其の浦を号けて血浦と謂ひき。今は都奴賀と謂ふ。（仲哀記）

『古事記』の記述になると、角鹿に下向した理由から名易えに至るまでの経緯が詳しく語られている。ここでは太子を率いての角鹿行きは禊ぎのためであったという。宿禰は太子を連れて淡海・若狭两国を經巡り、高志の前の国の角鹿に飯宮を造つ

て滞在する。そこで、神床に籠もつて神託を請うたのであろう。宿禰の夢に土地の伊奢沙和氣大神が現れて、太子との名易えを要求したという。これを承諾すると、夢のお告げ通り鼻に傷のある入鹿魚が浦に寄り付いていた。名易えに対する大神からのお札の品と判断し、それ以来、伊奢沙和氣大神を讃えて「御食津大神」と呼ぶようになった。後に「氣比大神」と言うようになった。また入鹿魚の血のにおいの臭さから、寄りついたこの浦を「血浦」と名付けた。現在は「角鹿」と呼んでいる、という地名起源譚である。

それでは、神功皇后は即位を前にした太子の守護神として、なぜ伊奢沙和氣大神を選んだのか。皇后が角鹿の神に拘る理由はどこにあったのだろうか。角鹿という土地には何か霊的なものが秘められていたのだろうか。

近年の研究では、太子の禊ぎを忍熊王との戦さでの死の穢れを払うためとする注釈書等が多い。『古事記』の説話配列を踏まえての説であろうが、死の穢れを払うためになぜ角鹿にまで行かねばならなかったのか、その必然性はない。またこの禊ぎは「淡海の手、又若狭の海辺などにて、御禊しつ、経歴賜ひしなるべし」（『古事記伝』）と宣長が指摘するように、数カ所を「経歴」しての禊ぎであった。葬送の習俗には、数カ所を巡歴する禊ぎなど見当たらない。

三品彰英・倉塚暉子はこの説話を成人式儀礼に基づくものとしているが、単なる成人式というより、あくまでも即位を前提としての成人儀礼と考えるべきであろう。この点については、「即位大嘗儀礼の表象」（日本古典集成『古事記』）、「王として

即位する前に死と復活の儀礼を行ったあとでの禊の儀礼がここに反映されていると考えられる」(日本思想大系『古事記』)、「無比大神参詣の話は、このような王権の承認と、巡行の後の即位、およびそれに先立つ待酒の儀礼といったものによって構成されており、すべてが応神の即位にまつわる前の段じりを示している」(中西進『古事記を読む 3』)などが、的確な指摘と言える。

このように、この物語は即位儀礼における禊ぎを通しての死と復活を語ったものであろうが、そうだとしてもなぜ角鹿でなければならなかったのか、角鹿という場所についての説明はまだなされていない。太子磐田別皇子を角鹿に連れて行かなければならなかった理由はどこにあったのだろうか。

## 二 「御食つ国」としての角鹿

角鹿という地を考える上で見逃せないのは、記紀ともに太子の角鹿行きを指示したのは神功皇后自身と記していることである。また仲哀天皇即位直後の行幸も皇后を同行してのものであった。しかも皇后は残されて筍飯宮に留まっていたのである。角鹿には神功皇后という存在が深く関わっていたと見なければならぬ。

この角鹿という地については、これまで古代朝鮮との交通の要衝、「御食つ国」としての角鹿などの指摘がある。まず角鹿は穴門と並んで、古代大陸交通の要地の一つとされ、古代日本への玄関口と位置付けられていた。まさに角鹿は穴門と並んで大陸との接点であった。それゆえか、次のような異人漂着伝説が生まれている。

「一に云はく、御間城天皇の世に、額に角ある人、一船に乗りて越国の筍飯浦に泊れり。故、其処を号けて角鹿と曰ふ。問ひて曰く、「何の国の人ぞ」といふ。対へて曰さく、「意富加羅國の王之子、名は都怒我阿羅斯等、亦の名は于斯岐阿利叱智干岐と曰ふ。伝に、日本国に聖皇有すと聞りて帰化す。穴門に到る時に、其の国に人有り。名は伊都都比古といふ。臣に謂りて曰く、「吾は則ち是の国の王なり。吾を除きて復二王無し。故、他処にな往にそ」といふ。然れども、臣、究其の為人を見るに、必ず王に非じといふことを知り、即ち更還りぬ。道路を知らずして島浦に留連し、北海より廻りて、出雲國を経て此間に至れり」とまをす。是の時に……」(垂仁紀二年是歲一云)

いわゆる都怒我阿羅斯等の漂着渡来伝説である。欽明紀三十一年(五七〇)四月には、高麗使人が風浪に辛苦して漂流し、越の岸に漂着したとする記事もある。また宝龜八年(七七七)正月には、悪風に遭って渤海使一四一人が漂没。生存者四六人に越前国加賀郡で供給した事実が『続日本紀』に記録されている。このように地理的に見て大陸との接点であり、文物や人物の交流の地でもあったことは確かである。

また角鹿を「御食つ国」と捉える説もある。たしかに角鹿は角鹿の海直(孝靈記)という海人部の一族の本拠地であった。続紀に敦賀直直嶋麻呂(天平神護元年五月)、越前国正税帳(天平三年)に角鹿直綱手などが見える。日本思想大系『古事記』によれば、「角鹿海直の本拠地は実は後の坂井郡海部・福留郷を中心とする地域であつて、古く角鹿の地は敦賀郡・丹生郡・

坂井郡など日本海岸の地一帯を包含していたと考えられる」とい<sup>55</sup>う。

応神記の歌謡に「この蟹や いづくの蟹 ももづたふ 角鹿の蟹」(記42)の詞句があり、『万葉集』にも「越の海の 角鹿の浜ゆ 大舟に ま梶貫き下ろし いさなとり 海路に出でて あへきつつ 我が漕ぎ行けば」(3・三六六 笠金村)と歌われている。このように角鹿は津や浜を有する海の幸の豊富な土地であり、それゆえに前節に掲出した仲哀記の入鹿魚の話は、豊かな海産物を産する「この一帯の、御食つ国としての服従を意味する」説話であり、それゆえ禊ぎの場所としてこの角鹿を選んだと倉塚は指摘する<sup>56</sup>。

また角鹿には、天皇の御料となつた塩の起源を語る話が伝えられている。

……真鳥大臣、事の濟らざることを恨み、身の免れ難きことを知り、計窮り望絶え、広く塩を指して詛ふ。遂に殺戮されて、其の子弟に及れり。詛ふ時に、唯角鹿の海塩のみを忘れて詛はず。是に由りて角鹿の塩は、天皇の所食とし、余海の塩は、天皇の所忌とす。(武烈天皇即位前紀)

皇太子(後の武烈天皇)と大伴金村連の軍に攻められた平群真鳥臣は、最後に塩を指して呪詛したが、角鹿の塩だけは忘れて詛いに使わなかつた。それゆえ天皇は他の地の塩は忌み嫌い、角鹿の塩のみを御料とするようになったという。実際は角鹿には製塩遺跡は稀なので、若狭産の塩が角鹿を通して運ばれたのではないかとも言われている。またこの説話から折口信夫は「禊ぎの汐の起源をも兼ねてゐるのである」とも指摘する<sup>57</sup>。

角鹿という土地についての二説を取り上げたが、異人漂着も「御食つ国」としての服従も、古代大和王権にとっては世俗的な意味でしかなく、角鹿でなければならぬという絶対的理由とはなりえない。大陸との交通上の接点という重要性をもち、また「御食つ国」としての意味をもっていたとするならば、後々までも王権との関わりをもたねばならない。仲哀天皇が行幸の第一歩を記す場所として、また誉田別皇子が即位に先立ち大神から名を受ける地としての角鹿。このような靈性を付与される禊ぎの聖地としての角鹿の説明としては、今一つ説得力を欠いている。

ところが、角鹿という土地についての記紀の記述を追ってゆくと、この垂仁、仲哀・応神朝に集中し、それ以前にもそれ以後にもまったく見当たらない。倉塚は志摩淡路と並ぶ御食つ国としての角鹿を強調したが、ならば、この後も歴史叙述に頻繁に登場しなければならぬはずである。なぜ角鹿は仲哀・応神朝のみに限って登場してくるのか。

また筒飯大神(氣比神)を六国史で見てゆくと、もつとも早くは持統天皇六年(六九四)九月に登場し、その後宝龜元年(七七〇)八月、同七年(七七六)九月と続き、九世紀中葉にもつとも多く記録されている。しかもその記事は奉幣と叙位、神宮寺等がほとんどである。こうした点から考察してゆくと、角鹿の地は古代王権との関わりというより、神功皇后との関係に限定されていたように思う。

### 三 神功皇后と天之日矛

そこで再度指摘したいのは、神功皇后との関わりである。なぜ皇后はここまで深くこの地と関わりなければならなかったのか。その理由の一つとして、神功皇后の出自を挙げる論者がいる。開化記・応神記によれば、皇后の系譜は次のようになって

開化天皇——日子坐王——山代之大筒木真若王——迦迹米雷王——息長宿禰王——息長帯比売(母親は葛城高領比売、祖母は丹波遠津臣の女、高材比売) (開化記)

天之日矛——多遲麻母呂須玖——多遲麻斐泥——多遲麻比那良岐——多遲麻比多訶——葛城高領比売——息長帯比売 (応神記)

この両系図から明らかなように、神功皇后の父は開化天皇の五世孫・息長宿禰王、母は天之日矛の六世孫・葛城高領比売である。即ち皇后は新羅国王の子・天之日矛の末流に位置しているのである。この系譜的關係にトポスとしての角鹿を解く鍵を見出せるだろうか。

天之日矛は応神記の伝えるところでは、逃げた妻を追って難波に入ろうとしたが、遮られて但馬国に留まりその地に子孫を残したという。また将来した神宝七種も但馬国に蔵されたと、応神記、垂仁紀三年三月、同八十八年七月が伝えている。さらに言うと、この天之日矛の伝説は主人公の名前を都怒我阿羅斯等と変えて、美しい童女と化した神石と結婚しようとしたが、童女は日本に逃げて難波の比売語曾の神となったとする同内容の説話を、垂仁紀二年是歳「一云」の第二伝承に残している。この両説話の類似性から天之日矛と都怒我阿羅斯等は同一人物

であり、「もと天日槍伝説から抜き出して角鹿の地名起源伝説をつくり、それにつけて都怒我阿羅斯等という人名を設けたものか」とする推測が可能となる。となれば、前節に挙げた垂仁紀二年是歳「一云」の第一伝承で、

御間城天皇の世に、額に角ある人、一船に乗りて越国の筥飯浦に泊れり。故、其処を号けて角鹿と曰ふ。問ひて曰く、「何の国の人ぞ」といふ。対へて曰さく、「意富加羅國の王の子、名は都怒我阿羅斯等、亦の名は于斯岐阿利叱智干岐と曰ふ。

と語られた都怒我阿羅斯も天之日矛その人と見なすことができ。また彼の停泊した「越国の筥飯浦」、即ち角鹿はこの伝承から日本への上陸地だったことが明らかとなる。角鹿は但馬と並んで天之日矛が日本に漂着しその第一歩を記した地と伝えられ、神功皇后の母方の父祖にゆかりの地であった。その一族にとって、角鹿こそは最も記念すべき聖地だったのである。

この角鹿に関して、三品彰英は天之日矛と息長帯比売(神功皇后)の伝説地が「その地理的分布において驚くほど一致している」と指摘している<sup>10)</sup>。こうした伝承の一致と系譜的關係は無関係とは言えないだろう。神功皇后を語り伝える人々の意識の深層に、天之日矛伝承がつねに重ね合わせられていたと考えられないだろうか。まさに角鹿は神功皇后と天之日矛を結び付ける象徴的な場所であった。

この繋がりを証明するように、『古事記』では仲哀天皇条で新羅征討譚を語ったのち、応神天皇条で天之日矛とその後日譚である伊豆志袁登売神の伝承を記録している。天之日矛は系譜

的には神功皇后の五世前にもかかわらず応神記に登載されたということは、仲哀・応神朝がいかに朝鮮半島と深い関わりをもった王朝として歴史認識されていたかを物語っている。まさに「応神天皇によって朝鮮を含む天皇の世界は確立された」のであり、『古事記』の応神物語は「朝鮮を含むものとしての天皇の世界の成りたち」を語っているのである<sup>11)</sup>。

角鹿は、このように神功皇后と朝鮮半島との関わりの必然を象徴する聖地であり、それゆえに神話性と宗教性をも秘めたトボスと言えるのである。

- 注(1) 『折口信夫全集 ノート編』第三卷(一九七二年一月 中央公論社) 一六二頁
- (2) 古典大系、古典集成、新編古典全集、三浦佑之『口語訳古事記』など。
- (3) 『本居宣長全集』第十一卷(一九六九年三月 筑摩書房) 四一七頁
- (4) 三品彰英『増補 日鮮神話伝説の研究』(三品彰英論文集第四卷 一九七二年四月 平凡社) 一二二頁、倉塚暉子『胎中天皇の神話』(『古代の女』一九八六年六月 平凡社) 八二頁、次田真幸『古事記 中』(一九八〇年二月 講談社学術文庫) 一九七頁
- (5) 青木和夫・石母田正・小林芳規・佐伯有清校注『古事記』(日本思想大系1 一九八二年二月 岩波書店) 三八〇頁
- (6) 倉塚暉子 前掲書(注4) 八二頁
- (7) 倉塚暉子 前掲書(注4) 一三八頁
- (8) 折口信夫『皇子誕生の物語』(折口信夫全集第十八卷

一九九七年一月 中央公論社) 三七九頁

- (9) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀上』(日本古典文学大系67 一九六七年三月 岩波書店) 二五八頁

(10) 三品彰英 前掲書(注4) 五一頁

- (11) 神野志隆光『応神天皇の物語』(『古事記学会編』『古事記の天皇』古事記研究大系6 一九九四年八月 高科書店) 二六四・二六五頁

- (12) もう一つの解釈として、中西進は継体天皇との関わりを指摘する。「大和の王者が……氣比に参拝するというのは、継体天皇が越前出身であるということに、その源があると考えるほかない」(『大和の大王たち 古事記を読む』3 一九八六年一月 角川書店。二一六頁)。

継体天皇は武烈天皇が後継のないまま崩御したあと、越前国坂井郡から迎えられて即位した天皇である。応神天皇五世の孫で、父は彦主人王、母は垂仁天皇の七世の孫の振媛。父が早世し、母の里の坂井郡で養育されていたところ、大伴金村・物部麁鹿火から迎えられ、河内の楠葉宮で即位した天皇である。すでに五十七歳になっており、在位中には山城・大和への遷都、任那四県の百濟への割譲、磐井の反乱などが起り、仏教の私伝があった。

この継体天皇の越前出身説では、角鹿を越えて地理的に広範囲となり、仲哀天皇の行幸及び誉田別皇子の参拝が角鹿であったことの説明にならないだろう。